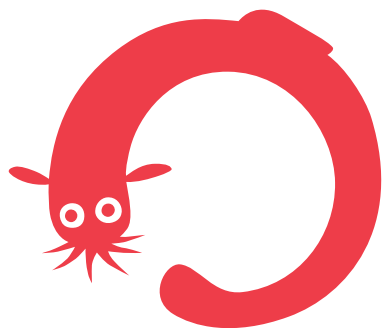


そうかわせみ、



そうかわせみ、
Vol.2



岡島弘子
みつつめのまぶた 2



一色真理
川のほとりで 6
ワルツ 12



伊藤浩子
夏の 16



相沢正一郎
森 18

みつつめのまぶた

朝はひらいて夜になると閉じる
オジギソウのような ふたつのまぶた
だれかがさわった と いったは閉じ
だれかがみつめた と いったはひらく

夏がめぐり

酷暑の熱風にめくられて
みつつめのまぶたがひらいた
薬指の先を扇風機にまきこまれたのだ

ひふはめくれ まぶたのかたち
えぐりとられてしまった
そのときからだ

爪のよこにみつつめの目がひらいたのは
あたらしい目は痛みとともに血を吹いて
閉じることをしない

消毒して きずぐすりをすりこんで

バンソウコウで まぶたのようにおおってみた

血がとまつても バンソウコウの下で

目はなおも閉じることをしない

生涯にいちどきりのものをみつけるために？

それを永遠にだきしめていたために？ みひらいたままなのか

消毒して きずぐすりすりこんで バンソウコウでおおう

夏もおわるころ

あたらしいまぶたが はえはじめていることに気づく

バンソウコウの下で

まだみつけられない まだみつけれられない

と ばかりに目は痛む

秋になつて

爪のよこの目は あたらしいまぶたに完全におおわれた

おわれたままの目の上で
まぶたはなおもうずく

生涯にいちどぎりのものを みつけられなかったくやしき？

桑畑 火の見やぐら お寺

わたしの育った村がみずかさを増す記憶のそこふかくしずんでしまった
小学校に行く草道をたどってもたどっても
もうどこへも行けない

朝はひらいて夜になると閉じる

オジギソウのような ふたつのまぶた

だれかがさわった と いつては閉じ

だれかがみつめた と いつてはひらくのに

みつつめのまぶたは閉じたまま

水をいつばいにたたえてうずく

みずかさを増す記憶のそこふかく

みてはならないものをみてしまったくやしき？

もうこぼれることのない水をはちきれそうにはらんで
うずく うずく

どこかでおおきなまぶたが閉じるまで

川のほとりで

野川のほとりに二〇階建ての高層マンションが建っている。緑色に塗られたドアが横に二〇個ずつ並んだこの建物は、誰でも（きみでなくても）コクヨのB5判原稿用紙を連想する。

日本で三番目に小さなこの街では一番高い場所だから、建設当初から飛び降りの名所とされてきた。自殺者はほぼ毎晩一人の割合で、それより多くも少なくもない。

もちろんオートロック式なのだが、住人の背中にびったりと貼り付くようにして玄関を入れれば、ハイスピードのエレベーターがすぐに原稿用紙の第一行の一字目まで連れていってくれる。

さあ、あなたの詩をここから書き始めなさい。誰もまだ読んだことのない、オリジナルでユニークな死の一行目を。……というように。

たとえばこんな一行目はどうだろうか？ ぼくはある日、二〇階にある緑色のドアの前で、ふと後ろを振り返ったことがある。すると、ぼくの背中にびたりと貼り付くように死人がいた。

間違えた。いたのは死人ではなく、詩人だった。ただ、首がなかった。きみには言い忘れていたけれど、ぼくの父親は生きていたとき、コクヨのB5判原稿用紙を愛用する詩人だった。そう。あの緑色の髪だけをひたすら愛していたのだ。

紙、じゃないかって？ 違うよ。誤植なんかじゃない。

これで二行の死が書けた。三行目はこんなふうにしたらどうだろう？ にわたりの首をはねると、そいつは悲鳴をあげて走りまわる。もう首なんてないのに。

にわたりの声帯は喉より心臓に近いところにあるから、死ぬまで叫び続けられるのだ。まるで詩人じゃないか。

おや。ぼくが書かないのに、誰かが四行目以下を書いてしまった。これだからコクヨの原稿用紙はいやなのだ。死が書け過ぎるからね。

あの日、ぼくの父親はひとりで二〇階まで上がり、そこから墜落した（ことになっている）。遺書は緑色の原稿用紙に赤インクで書いてあったので、父親の心臓からあふれた血と混じりあい、読めなかった。

いや。最初から血で書いたのかもしれない。どこからが血で、どこからが文字なのかわからない。現代詩って、そんなものらしいね（笑）。

ともかく死を書き続けよう。きみはこのマンションの二〇階で暮らしていた。きみは緑色の髪（これも、誤植ではないよ）をした、いかにも父親好みの、地上に影を引かない女性だった。

話が混乱しているって？ いや。これでいいのだ。その夜、ぼくは父親が訪れる前に、ひと足早くあの部屋を訪ねたのだ。そう。きみ

の部屋を。そして背後をつけてきた父親に見つかった。

父親は持っていたペンを振り回した。それしか持ち合わせがなかったからだ。そいつは父親が詩を書くときに使っていたものだが、時には凶器になる。ぼくはそいつで両目をえぐられた。

その瞬間、ぼくには今まで見えないものが見えるようになった。首をなくした血だらけの詩人がいつまでも悲鳴をあげながら、ぼくのまわりを駆けまわるのだ。

さあ、そろそろこの死を書き終わる時がきた。ぼくは現代詩人じゃないから、できるだけロマンチックに終わりたい。陳腐だつてかまわないさ。たとえば、こんなふうに。

「お母さん！ 先立つ不孝をお許してください。ぼくはお母さんを愛していました！」

でも、緑色の原稿用紙に書くと、この一行は意味が変わるんだ。今

夜、マンションの真下の地面で、ぼくの両目からどくどくとあふれ
出た赤いインクで書くと、こうなる。

「お父さん！ ぼくはあなたを殺しました。あなたから愛する妻を
奪うために！」

これだから、コクヨの原稿用紙はいやなんだ。いつまでも赤インク
が乾かない。ぼくの死体も父親の死体もいつまでも血を流し続ける
ばかりで、ちつとも本当に死ねないじゃないか。

今夜も死んだぼくは高速エレベーターに乗って、マンションの二〇
階にたどりつく。そして、ぼくは父親に両目を突かれ、顔のない死
体を突き落とす。緑色の髪のみみの部屋の前で。繰り返し、繰り返
し……。書いては消し、書いては消し……。

だから、今夜もまた野川の二〇階建てのマンションの真下には、一
行だけ詩が落ちている。いや、一個だけ、死体が転がっているとい
うわけだ。

数えてみると、この詩は九〇行あった。つまり、ぼくと父親とはき
みの読んでいる詩の上で、九〇回殺し合った。そして、まだまだ殺
し合うつもりだ。

海がこんなに明るいのは、底に身重の満月が沈んでいるからだ。おまえの名はマミー。場末のピアノ弾きだ。誰でも知っていることだが、マミーは三人の子持ちだった。長男は酒場の赤い屋根の上にかかる雲で、隣町からときどき雨を降らせに立ち寄るらしい。次男は灯台のような大男だが、夜になると港に生えた血みどろの乳首を吸っているようだ。噂では鏡に映ったおれによく似ているらしい。末娘は誰も名前を覚えないうちに、青い灰になつて浜風に散つてしまった。ただし、亭主のことは誰も知らない。港町ならどこにでもよくある話さ。

またひとつ廃工場の裏で死体が見つかった。古い錆び付いた鍵がひとつ、ポケットからはみだしていた。これもありふれた話。棧橋の向こうから「お母さん」「お父さん」と呼ぶ声がしきりにするが、潮騒かもしれないな。物干し場には、もう大きな耳が所構わず生えているだろうか？ あの声の聞こえる夜は、決まつて胞子があちこ

ちから飛んでくるから。

探偵は鏡の前で帽子をかぶり直したところだ。出動する前に、血の色のネクタイで首を絞め直さなくてはいけない。急がなくては。だが、さつきまで譜面に向かつていたので、頭がソナタの第三楽章から切り替わらない。そういえば昨夜、おれのベッドを大きな蟹でいっぱいにした犯人は誰だろう？ 赤い毛むくじやらの脚がわざわざと動くから、まるで火事みたいだったじゃないか。

港でバスを降りると、また女のように熱い潮が満ちてきていた。海岸通の商店街の中ほどからみるみる長い舌が出て、唾液で街路樹を濡らしていく。探偵は懐中時計を取り出して、呟く。天文観測所の予報によれば、そろそろ月の出の時刻だ。酒場の老いた主人が濡れた指で酒場のピアノの蓋を開けるだろう。そして、またひとつ死体を見つけて……。

もう黒猫興信所も閉鎖する潮時だな。詩人も音楽家も生きていけない小さな町で、探偵が飯の種になるはずもないのだ。最後の報告書

にはこれだけ書いておこう。

*

この町でおれが見つけたものは何もかも「偽物」だった。一等航海士殺人事件の犯人も、おまえに捧げた婚約指輪のルビーも、おまえのデビュリーサイタルの夢も。(苦心して貯めた金は、火星から来た円盤の男に持ち逃げされた……) でも、おまえへの愛だけは「本物」だったから、とうとう見つけられないまま、おれはこの町を出ていく。

そうだ。あの部屋の鍵だけは残していくよ。實在しないスイートホームの、實在しない花嫁のための、實在しない衣裳部屋の……、古い恋歌のような錆びた鍵だ。おまえに借りたものはみんな、手書きの五線譜の上にある。

さよなら、海に沈んだマミー。おまえの亭主の死体もそのあたりの水の底で、赤い毛むくじやらの蟹に食われたはずだ。引き金は固く

て、硝煙はひどく目に染みたな。あの夜も「お母さん」「お父さん」と呼ぶ声がしきりにした。海鳴りだったかもしれない。おれの親指がどうしても曲がらなくなったのは、それ以来だ。けれど、

おまえに習ったピアノは今でも弾ける。弔いのワルツは一つも音を外さなかったよ。

夏の

土と風とにふちどられて
川のほとりへ

傾きながら
ひぐらしが俯く
赤い花が咲きほこり
茎をむしると
指さきはもつと驕った

埋めたものが
どうしてもおもいだせない

この次は
もうすこし奥のほう
深いほうへと

よごれを流した川下に

訊ねあう
聴きなれない風音が
また
波をおこして

今もまだ
同じ節目に
埋まっているはず

夕餉がすむと
すっかり整えられた縁側に
ほてる夜を積みあげた
あんなにも
さびしかつた夏の

誰もしらない
落し子だった

森

森へ行こう——テーブルの下から声が……。

いま、わたしはテーブルの上に東村山市の地図をひろげている。わたしの住む街〈東村山〉は、名前からして「田舎」という印象がよいんだけど、じつは東京のまんなか。といつても、東京を熱帯魚の形として見てみると、東村山は背びれにあたる場所にある。埼玉県との境で、わりと緑が豊富。交通の便はよく、東村山駅から西武新宿線の急行に乗って新宿まで三十二分、西武池袋線を利用して池袋まで三十四分。

東村山は、はじめ「村」。それから人口が増えて、「町」に。だけど、ここでは、「街」と書くことにする。食べものの匂いと生活のざわめきが、真夜中になると濾過され、静かな場所に変わるキッチンには、「街」のもつ透明なイメージと響きあう——そんな気がするから。

一万分の一の地図の一点をゆびさす——昼間、犬を散歩に連れて行つたところだ。駅前の商店街の「饒舌」のすぐ近くに、「沈黙」というよう「間」のような、ちいさな森がある。〈八国山緑地〉と呼ばれたこの森は、上野・下野・常陸・安房・相模・駿河・信濃・甲斐——八つの国

を望むことができた。いつか森は、〈七つ森〉と名前を変えて、アニメの舞台に。それから、いまでは〈トトロの森〉の名前で知られている。

森へ行こう。……森に行つて、死体を見よう——ふたたび声が……。

テーブルの下、わたしが脚をのぼすと、足の先が、眠る犬の呼吸にあわせてゆつくり波うつ毛並にふれ、生きものの鼓動を感じる。ここから先は、一万分の一万の地図——わたしは、ここで鳥の歌を聞いた。ハナミズキを揺らす風を感じた。藁といつしよに川をゆつくり流れるペットボトルを見た。竹箒のはきめのような雲を読んだ。

でも、ここは「森」というより、「天然林」に近いような気がする。森の奥にわけいる、というよりも、お年寄りの散歩コース。地肌の見える薄毛のように背の高さのそろった木々がまばらで、森のもつ暗さがま

でない。

いつのまにか揺れてる瞳を閉じると、わたしの前に道がのびている。テーブルの下に声が誘われて、わたしは歩きだす——テーブルの上に地図をひろげたまま。そうだ、森へ行こう。……森に行つて、死体を見よう。草むらに横たわっているその死体が、たとえわたし自身だったとしても。

同人住所

相沢正一郎 / 〒189-0024 東京都東村山市富士見町3-17-24

一色真理 / 〒201-0002 東京都狛江市東野川3-17-2-302

伊藤浩子 / 〒403-0016 山梨県富士吉田市松山3-4-222-201 宮下方

岡島弘子 / 〒201-0002 東京都狛江市東野川3-17-2-302

そうかわせみ、Vol.2 2010年12月20日発行

頒価500円

編集：相沢正一郎

発行：そうかわせみ、の会 〒201-0002 東京都狛江市東野川3-17-2-302 一色方

印刷：遠藤印刷 〒102-0072 東京都千代田区飯田橋1-6-9

表紙：相沢育男
